

月
刊

いろいろなとも

第十四卷
七月号

人間に癒されない

いま

人間が人間に

癒されなくなってきた

その分だけ

動物に

植物に

音楽に

運動に

趣味に

癒される

日本が誇る文化

日本が世界に誇る文化

まんが

援助交際

引きこもり

人生を考え直して

みたい人は（一一四）

— 空海『即身成仏義』解説（一七）—

（五）― 2 『金剛頂經』の四種曼荼羅

もし『金剛頂經』の説に依らば、四種曼荼羅とは
一には、大曼荼羅、謂く、一一（いちいち）の仏
菩薩の相好（そうごう）の身なり。またその形像
（ぎようぞう）を綵画（さいが）するを大曼荼羅と
名づく。また五相を以て本尊の瑜伽を成ずるなり。
また、大智印と名づく。

二には、三昧耶曼荼羅、即ち所持の。幟の刀剣、
輪宝、金剛、蓮華等の類（たぐい）是れなり。もし
その像を画するも、また是れなり。また二手を以て
和合し、金剛縛を発生（はつしょう）して、印を成
ずる、是れなり。また三昧耶智印と名づく。

三には法曼荼羅、本尊の種子真言なり。もしその
種子の字を各本位に書く、是なり。また法身の三摩
地、及び一切契経（かいききょう）の文義（もんぎ）
等、皆是なり。また法智印と名づく。

四には羯磨曼荼羅、即ち諸仏菩薩等の種種の威儀
事業（じごう）、もしくは鍔（ちゆう）、もしくは捏（
ねつ）等もまた是れなり。また羯磨智印と名づく。

（五）― 3 不離

是（かく）の如く四種曼荼・四種智印、その数
無量なり。一一の量、虚空に同じ。彼れは此れを離
れず、此れは彼れを離れず。猶（なお）し空光（く
うこう）の無礙にして逆（さか）えざるが如し。故
（かるがゆえ）に「四種曼荼各離れず」と云う。不
離は、即ち是れ即の義なり。
。は巾へんに票

今回も、現代語訳を金岡秀友訳・解説『空海即身成仏
義』（太陽出版社刊）から引用させて頂きます。

* * *

またあるいは、金剛頂の諸經典に説かれていることに
よると、「四種曼荼羅」とは、第一には大曼荼羅をあげ
ます。これは、それぞれの仏・菩薩たちの相好・容貌の
そなわった身体（相好身）です。また、その容姿のいろ
どり（綵）を絵に描いたものも、大曼荼羅と名づけま

す。また、真言の教えを身体に修め行つて成仏をめざす行者
が、「五相（輪）成身觀」という、大日如来の五つの相
を行者の身体に成就させる觀法を成し遂げ、大日如来を

実現した場合の、その仏身も、大曼荼羅といい、行者の智をもつて六大を生身に印（しる）しあらわした仏身であることから、大智印と名づけれます。

第二には、三昧耶曼荼羅をあげます。これはすなわち、仏・菩薩が所持されている刀や剣、法を広めるときに先触れとなり全ての障害を打ち砕く宝の車輪（輪宝）や、何でも思いのままになる宝の珠（宝珠）、煩惱を打ち砕き、法を実現する心を表すインドの古代の武器（金剛杵（しよ））、蓮華などの類の、仏・菩薩の悟りの内を。

幟象徴する品物を指し、これらを絵に描いたものもまた、三昧耶曼荼羅と言います。また、左右の手を合わせ、五指を交互に組んで指先を曲げる「金剛縛」という形を基本として、それから種々の印を結び出す場合も、その印契（げい）は、仏・菩薩の悟りそのものを表し、種々の教導感化の誓いを表すものですので、これを三昧耶曼荼羅といい、これも行者の智をもつて実現した三昧耶形であることから、三昧耶智印と名づけれます。

第三には、法曼荼羅をあげます。大日如来の直接説法のことばである種子（しゆじ）真言を法曼荼羅といい、これを梵字で曼荼羅上の諸仏の正しい位置に書き表したのも、法曼荼羅です。また、行者の修行の対象となる諸々の仏・菩薩のもつとも深い心の統一境地（法身の三

摩地）も、全ての經典の内容（契經の文義等）も、法曼荼羅といい、行者の智をもつて法を実現するところから、法智印と名づけれます。

第四には、羯磨曼荼羅をあげます。すなわち、諸々の仏・菩薩の行住坐臥の動作や働き（威儀事業）を言います。また、金属を鑄（い）たり、土をこねたり、木石を彫刻したりして、仏のすがたを表した場合、これも羯磨曼荼羅といい、行者の智をもつて実現するところから、羯磨智印と名づけれます。

このような四種曼荼羅と四種智印とは、法身の様々な姿ですから、四種類に分類していても、数は数えきれないほど多数で、その一つ一つの分量は、限りなく広がる虚空のように、限界を決めて量ることができません。四種曼荼羅の表現の一つ一つが、それぞれ法身の全てを込めているので、それらは互いに個であり、全体でもあり彼と此とは深く関わり合っています（彼此不離）。それは例えば、空中に無数の光が指している時に、互いに妨げ合わず溶け合い、大きな輝きの中で逆らい合うことがないようなものです。ですから、「四種曼荼羅、各離れず」というのです。「離れず（不離）」とは、頌の言葉で言えば「即身成仏」の「即」の意味するところです。

* * * *

今回は、取り上げる分量が多くなりましたが、きりのよいところまでということ、こうなりました。

さて、今回は『大日経』に書かれたものを取り上げましたが、前回予告しましたように、今回は『金剛頂経』に基づくものを取りあげています。

この解説的な現代語訳をお読み頂きますと、さして説明がいる言葉はないように思います。

ここでは、私の理論をはさんで、少し異なった観点からですが、出来るだけ分かりやすく解説してみたいと思います。

なおこの大曼荼羅、三昧耶曼荼羅、法曼荼羅、羯磨曼荼羅を略して「大・三・法・羯（だいさんほうかつ）」と呼んでいますので、ここでも、まとめて四つの曼荼羅に言及するときは、この略称を用いることにします。

まず、この文章をよく読みますと、大・三・法の順に段々と抽象の度合いが高まっていることにお気づきではないでしょうか。

つまり、大曼荼羅は、前回お配りしました現図の両界曼荼羅をご覧いただきますとお分かり頂けますように、全体的で、具象的な人格化された尊像から成っています。次の三昧耶曼荼羅は、ここに取り上げられています經典の記述にもありますように、また、曼陀羅図からもお分

かり頂けますように、尊像そのものを脱して、その一部である所持物や両手で作る「印」などから成っています。そして、次の法曼荼羅は、さらに抽象度を高めて、尊像の形を離れ、完全に抽象的な文字で表されています。

そして、最後の羯磨曼荼羅は、大（尊像そのもの）、三（その一部）、法（文字）の各曼荼羅の統合になっているのです。つまり、こうした、尊像、その一部、文字で表される仏・菩薩が、己の体得した法を実現せんとして実践活動をする、そのこと（威儀事業）を表しているのです。

実は、これは、私の提唱しています「人間精神の心理学モデル」における意識領域の段階に、まさに対応しています。

具体的に言いますと、大曼荼羅は「情動―感情（意・こころ）」の働きに、三昧耶曼荼羅は「感覚―運動（身・からだ）」の働きに、法曼荼羅は「認知―言語（口・あたま）」の働きに、最後に、羯磨曼荼羅は「自我―人格」の働きに、それぞれ、対応しているのです。

真言密教の言葉で言いますと、大曼陀羅が「意」に、三昧耶曼荼羅が「身」に、法曼荼羅が「口」に、それぞれ対応しています。お祈りで言いますと、こころ（意）に具象的で人格的な尊像を想い、手（身）にその尊の印

を結び、口にその尊の真言（字）を唱えながら修法を行うのです。

余談ですが、参考までに申しますと、前掲の「心理学モデル」の四つの機能（働き）領域は、人間の発達の順序に対応しているのです。まず、情動―感情機能の発達が（胎児期も含めて）起こり、次いで、情動―感情機能が発達し、最後に、認知―言語機能の発達が起こるので

す。そして、自我―人格機能は、具体的には、精神全体を「統合・組織化」したり、私たちの実際の行動に「目的」を付与し行動を「能動化」して、それを「評価・修正」します。また、精神や行動に「一貫性」を持たせる働きもしています。ですから、それより下位の情動―感情、感覚―運動、認知―言語の働きの充実に伴って、この自我―人格も内容が充実してくるのです。（なお、これらの四つの対応の前者が「自己」に、後者が「他己」に属します）。

ここで、忘れてならないのは、これらの四つの領域と自己と他己とは、常に、全体としてバランスを取って働いているということです。そのバランスは、実は、発達が低位である、年齢的に幼少であるほど、保たれ易いということです。

しかし、年齢が進んで、例えば、青年期に至って、自分の認知―言語能力や感覚―運動能力の優劣への執らわれが出て来たり、情動―感情の発達に偏りが出て来たり、あるいは、自己と他己の発達が歪んで、その統合が取れなくなつて来たりしますと、全体のバランスが崩れて行きます。そして、その崩れが大きくなりますと、精神的な健康が保てなくなつて行くのです。

実は、真言密教の修行は、この精神のバランスを、最終的には、完全に取り戻すことを目指しています。

そして、バランスを完全に取り戻した状態である解脱に至った精神の表現が、この曼荼羅なのです。ですから、当然ながら、曼荼羅のあり方と、私の「心理学モデル」とは互いに対応したものになるということなのです。

取り上げました最後の「不離」の部分が、このことを述べているのです。

情動―感情における表現も、感覚―運動における表現も、認知―言語における表現も、さらに自我―人格に基づく表現も、無限の変異があり得るのです。しかし、それらはいずれも解脱した、一つの全体的にバランスの取れた精神の現れなのです。不離とは、無意識（髄識）での統合と意識との表現が、常に離れることがない、つまり、この身に「即」しているということなのです。

自作詩短歌等選

じり貧の日本

ものづくり
衰退すれど
サービス業
隆盛もせず
じり貧日本

政治家は自ら正せ

政治家や
高級官僚
サラリーを
ぎょうさん取って
何が改革

国家目標がない

日本には
国の本来あるべき姿の
議論がない
また
国家目標や国家戦略も
議論されない

と主張する人がいる

でも

なぜそうなるのか
指摘がない
そこにこそ
日本の陥っている
社会・精神病理が
あるのだが

規範意識を取り戻せ

日本ではいま

凶悪な

強盗	殺人	強姦	放火
----	----	----	----

などが頻発している

日本人の規範意識が

薄れてきて

社会のたがが

益々緩んでいるからだ

社会という樽は

単なる一枚々々の

木片に還元されつつある

このままだと

ますます

凶悪犯罪だけではなく

犯罪そのものも

どんどん増加するだろう

これを止める方法は

「神・仏を信じるころ」と

「人の心を感じるころ」を

取り戻すこと

対症的法的には

罰則を強化すること

五穀未満の稲作禁止

ある篤農家は
いう

今の日本では
五穀未満の稲作は
割に合わないから
法律で禁止すべきだ
と

北海道では
二十畝の稲作でも
毎年五百軒も
離農者がでている
というのに

いま日本では
政府による
政策的な保護が
必要なのだ

所得保障なり

無担保で

無利子の貸付なり

輸入制限なり

最も望ましいのは
農林産品は
原則輸出入禁止に
することだ

カルト教団入信

日本人

真の宗教

失って

信じるものは

カルト教団

教育改革

どれほどに

制度変えても

哲学を

変えないかぎり
よくはならない

出生率の低下傾向

出生率が

今年も低下した

今後も続けて

低下するらしい

セックスは楽しむが
子は作りたくない
ということなの？

元軍人のホームレス

アメリカのホームレスの
三分の一（約二五万人）
が

元軍人だという

その約半数が
PTSDや薬物依存など
なんらかの精神的な病を
もっているらしい

強者の社会

アメリカの

一つの実体

イラク戦後処理

アメリカに

そうはさせじと

フランスさん

意地をおすが

不発におわる

自作随筆選

老いの超克

私は、朝三時台に目が覚めることが多いのですが、目覚めたら、仕事に取りかかります。英文を書いたり、詩や短歌を書いたり、新聞の切り抜きをしたり、本を読んだりして過ごします。そして、そうしながらですが、深夜ラジオを聞きます。大抵は、NHK第一放送のラジオ深夜便です。その番組の、四時過ぎから五時まででは「この時代の」で、いろいろな方の人生論のようなものを、多くはディレクターのインタビューで、語ってもらうというものです。

少し前でしたが、この番組で、生化学者で東京理科大学薬学部教授の田沼靖一という方が、細胞の自死である「アポトーシス」と老いのことを話されました。

私は、もうかなり前のことですが、初めてこのアポトーシスの話を聞いたとき、それは、人間が「刹那に死に刹那に生きる」ことの生理学的な対応現象だ、と思えましたので、このお話もとても、興味深く聞くことができました。早速、この方が書かれた本を注文し、読んでみ

ました。その本は『ヒトはどうして老いるのか―老化・寿命の科学―』（ちくま新書）です。

確かに、アポトーシスは、私の考えたとおりだったことが、この本で確認できたのですが、失礼ながら、「老いの意味」について書かれたところは、全く、頂けませんでした。

やはり、老いについては扱い難く、哲学者さえも、老いについては殆ど言及していません（死については書いている人は多いのですが）。また、心理学者なども「老年学」として老いを取り上げていますが、それは、老いの意味というより、老化現象を、心理学的に、あるいは、社会心理学的に、取り上げているに過ぎません。

私も、老いにつきましては、ずっと以前に、この『このころのとも』の随筆で「より美しく老いるためには」と題して取り上げました（平成四年・第三巻二月号）。これは、どこかの老人会で、この題で講演を依頼されて書いたものだと思います。ご参照いただければ幸いです。そこでの結論は、美しく老いるためには、修行がいる、ということでした。今回は、老いについてもう少し詳しく検討してみたいと思います。なお、ここで取り上げますのは、どこまでも人間の「精神の老い」についてであることを、あらかじめお断りしておきます。

釈尊は「人生は苦」と言われました。それは、具体的には、四苦（生・老・病・死）とそれに次の四つを加えた八苦です。怨憎会苦・愛別離苦・求不得苦・五盛陰苦（ごじょうおんく）。

この四苦の二番目が「老」です。人間は、どんなに栄耀栄華を究めても、「死」を逃れることは、できません。誰でも、もつと生きていたいと思うのに、死んでいかなければならないのです。「いや、自分は老衰で死ぬと思うから、そんなにもつと生きたいなどは、思わない」と言われる方があるかも知れませんが、でも、もし自分の子どもが、あるいは連れ合いが、何か不治の病気や事故などでポツクリ亡くなったとしたらどうでしょうか。そんな目に合わない保証は、誰にもないのでから。そうした避けえない苦である死を予感させるものが、人生の盛りを過ぎて、確実に先行きが短くなってきたことを実感する老であるわけです。

釈尊は、こうした苦を逃れる道・超越する道を私たちに示して下さったのです。それが釈尊の教えなのです。その超越した境地は、例えば、『釈尊のことば』の次の偈に見られます。

（二一）つとめ励むのは不死の境地である。怠りなまけるのは死の境涯である。つとめ励む人々は死ぬことが無

い。怠りなまける人々は、死者のごとくである。

（二二）このことをはつきりと知って、つとめはげみを能く知る人々は、つとめはげみを喜び、聖者たちの境地をたのしむ。（以上の二偈は、第三卷九月号で解説）（一〇）素行が悪く、心が乱れていて百年生きるよりは、徳行あり思い静かな人が一日生きるほうがすぐれている。

（一一）愚かに迷い、心の乱れている人が百年生きるよりは、智慧あり思い静かな人が一日生きるほうがすぐれている。

（一二）怠りなまけて、気力もなく百年生きるよりは、堅固につとめ励んで一日生きるほうがすぐれている。

（一三）物事が興りまた消え失せることわりを見ないで百年生きるよりも、事物が興りまた消え失せることわりを見て一日生きることのほうがすぐれている。

（一四）不死の境地を見ないで百年生きるよりも、不死の境地を見て一日生きることのほうがすぐれている。

（一五）最上の真理を見ないで百年生きるよりも、最上の真理を見て一日生きることのほうがすぐれている。

（以上の五偈は、第五卷十一月号で解説）。

皆さんには、ご理解いただけないかも知れませんが、解脱した後の一日一日は、永遠の一日一日なのです。今

日一日が永遠なのです。それをしみじみと実感できるのです。つまり、それは、不死の境地・死を超越した境地に達していることを示しているとも言えるわけです。

そうなることは、死を超越しているわけですから、四苦の残りの生・老・病の苦も超越しているのです。

実際の肉体は死によって消滅しますが、精神は死を超越しているのです。ですから、老もそうで、実際の肉体は、皮膚にしわが増え、つやも消えて、たるみます。体力も衰えます。腰がかがむこともあるでしょう。猫背になることもあるかも知れませんが、そのように老人らしい肉体にはなりますが、でも、精神は老いることがないのです。

田沼靖一氏は先にあげました著書で、老いて、それまで働いて来た職場から引退した後は、自分の自由な時間を、夢や希望をもって生きる勇氣や冒険心が、大切であると述べていますが、なぜそんなことができるのかについての記述はありません。

たしかに、夢や希望を持てれば、精神は老いていないと言えると思います。でも、平均寿命が何歳で、自分が今何歳であるかは、分かっていますので、青壮年に較べて自分の人生の前途が否応なく限られて来たと感じているわけで、果して、夢や希望を持つことが、老人にそう

簡単にできることなのでしょうか。こうしたことを私の理論で、少し考えてみたいと思います。

人が夢や希望を持つのは、「自己」の働きに属します。未来に向かって生きていこうとする、自らの生命力のほとばしりとして、そういう意欲がわいてくるのです。

この生命力は、自己の働きなのですが、でも、その働きの、もつとも活き活きとするのは、実は、他己との統合が取れたときなのです。

つまり、先に「釈尊のことば」で見ましたように、人間は「百年生きるよりは、一日生きるほうがすぐれている」と感じる境地になれると、述べておられますが、その一日は、何にも増して充実した一日なわけで、それは、死も老いも克服した夢や希望に満ちたものなのです。

ですから、老いても夢や希望が持てるためには、そうした解脱の境地にいたることが第一なのですが、最終的にはそうなるとしても、初めからそうなるわけではありません。では、次善の策として、どうすればよいのでしょうか。それは、前出の偈の(一一)と(一二)で述べたことなのです。再掲しますと、

(一一) つとめ励むのは不死の境地である。怠りなめるのは死の境涯である。つとめ励む人々は死ぬことが無い。怠りなめる人々は、死者のごとくである。

(二二)このことをはっきりと知って、つとめはげみを
能く知る人々は、つとめはげみを喜び、聖者たちの境地
をたのしむ。

つまり、「つとめ励む」ことが大切だということです
が、何についてそうするのでしょうか。それは、言うま
でもなく、釈尊の教えに則って生きていこうと「つとめ
励む」ということです。

それは具体的には、例えば、八正道（正見、正思、
正語、正業、正命、正精進、正念、正定）
や六波羅蜜（布施、持戒、忍辱（にんにく）、
精進、禅定、智慧）を实践することです。

私は、五〇歳を過ぎたら、自分や自分の家族の生活の
こともあるとは思いますが、どちらかと言えば、社会へ
の恩返しに重きを置いて生きるべきだと思っています。

そうすることは、自分への執着を減らし（あるいは滅
し）、他者のために何かをさせて頂くことを生き甲斐に
することなのです。そして、そうすることこそが、自分
の生を意味あるものにする道なのです。この世に生まれ
てきてよかったと思える道なのです。

五〇歳頃までは、自分のため、自分の家族のため、つ
まり、自分の子や連れ合いのため、あるいは、自分や連
れ合いの親のためであることを第一にして働かなければ

ならないかも知れませんが、五〇歳台になりますと、親
ももういなくなることが多いでしょうし、子も巣立つて
いきます。

また、六〇歳になりますと、現在、多くの人は職場か
らも引退することになります。医学が進歩し、栄養状態
がよくなった現在では、まだまだ残された人生の時間は
沢山あります。

この時間を大切にして、生きていて本当によかった、
いっお迎えがきてもよいと思えるようになるには、自己
への執着を捨てなければなりません。そのためには、毎
日の修行がいります。ヨーガ、坐禅、読経、など何らか
の修行・精進がいります。そして、それと同時に何か、
直接、人さまのお役に立つことをすることです。人さま
にお布施やご奉仕をさせて頂くことです。そうしていれ
ば、必ず、生きる喜びが勝手に湧いてくるのです。

言うのは簡単ですが、実行はなかなか難しいと思いま
す。でも、そうする事だけが、自分の真の生き甲斐を見
つけられる道なのです。田沼氏の言葉で言えば、夢や希
望を持てる道なのです。

それは、死を超越した境地ですし、したがって、精神
の老いもありません。一生、青年のようなみずみずしい
心を持ち続けることができることでもあるのです。

後記

一、今年ほど梅雨らしい梅雨も珍しいのでは。
 二、毎日、畑に行きます。草刈りに追われています。
 三、地はいきゅうりを植え、カヤを敷いていますが、毎日のように収穫して食べています。
 四、また、健康によいということで、カボチャも何十本も植え、カヤを敷いています。沢山なっています。
 五、キャベツに蝶が舞い、青虫が取っても取ってもわいてきて困り、遂にスミチオンを散布しました。あつという間にいなくなりました。今、収穫して食べています。
 六、さつま芋に、飼っている烏骨鶏の鶏糞と化成肥料を追肥した後、土寄せをし、カヤを切って一面に敷きました。どんどん蔓と葉が繁ってきています。敷いたカヤの下を見ますと、ミミズがいて土が粒状になっています。
 七、メークインもダンシャクもジャガイモを全て掘り取りました。今年は、全くの無農薬でしたが、とてもよくできていて、大きなのが沢山取れました。毎朝、朝食の主食として、おいしく頂いています。
 八、大豆を苗床に植え、苗を移植しました。先日、追肥・土寄せをして、カヤを切って敷きました。
 九、四月始めに植えた里芋の最後（三回目）の追肥・土寄せを終わり、カヤをそのまま敷きました。もう、ミミズが来っています。

十、ひびきのさとのホームページのアクセス数が増えてきました。先日、ある方の弘法大師空海関連のリンク集に入れて頂きました。『即身成仏義』解説のほか、ホームページを含めて面白く読んで下さっているようです。十一、他にも、現代の性道德の乱れを指摘した私の随筆が、匿名のホームページで批判対象として取り上げられ、知らないうちにリンク集に入れられていました。十二、先日韓国からのeメールで、論文の参考にするかと、ある巻号の『こころのとも』の請求がありました。

月刊 こころのとも 第十四巻 七月号 (通巻 一六三号)	平成十五年七月八日 〒772-8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 ^{サトウ}
---	---

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610-8-38660

